

道普請人 ウガンダでの活動報告

近畿大学理工学部社会環境工学科 3 回生 近藤宇晃

1.参加動機

私は「道普請人」プログラムに参加し、ウガンダにて道路整備やダム・ため池建設の活動に従事いたしました。参加の動機は、大学の教授に「日本とは生活様式が全く異なる環境で学び、価値観を広げたい」と相談したことでした。その際に本プログラムを紹介していただき、実際に現地で社会インフラの必要性を肌で感じられる機会だと考え、参加を決意しました。



画像 1 初回授業の様子

2.活動内容

現地ではまず、ため池の建設に取り組みました。乾季になると家畜の飲み水が枯渇し、農作物も育たなくなるため、水資源を確保する施設の整備は地域の生存に直結していました。制作過程としては、まず施工予定地を 20m×30m の四角形になるよう測量し、大型ショベルカーを使用してくり抜きました。その際驚いたのが、日本と違い掘り返した土砂をそのまま周りに放置していたことです。少し現場に行きにくくなりましたが、確かに運搬の時間と費用のコストを考えると周りに迷惑をかけるわけでもないため合理的なのかもしれないと思いました。

掘削した形は四角錐台というもので、後ほど微調整をし、土嚢を用いて高さを合わせて体積が $1,560\text{m}^3$ になるように盛り土をしました。

その後周りを柵で囲い、ほとんど完成目だったのですが、乾季にも関わらず雨が連続して降ってしまい、水抜きをしなければビニールを被せることができないため、工期が大幅に遅れてしまい、完成を見る前に帰国しなければいけなくなってしまいました。



画像 2 測量の様子



画像 3 掘削の様子

また、道作りプロジェクトにも携わらせていただきました。ウガンダではほとんどの道路が舗装されておらず、一部の地域では雨季になると道が水没し、カヌーで渡らなければならないほどで、人や物資の移動が生活の大きな妨げになっていました。

その現状を変えるため、カルバートと言われる筒を道路と垂直になるよう通し、水の通る道を作ることによって排水を円滑にする工事をしました。

まずは現場の高低差を測量し、カルバートを入れる場所が一番低くなるよう傾斜させる目安を打ち込みました。その後地面を整え、その上に新しく土を被せ、土嚢で強度と水捌けをよくしました。最後に側溝を作り、完成という流れでした。



画像 4 土嚢を並べる様子



画像 5 陽気な現地の人々

3.気づいたこと・学び

私はこの活動を通して、まずはインフラ設備の重要性を学びました。日本に住んでいるだけ

では、道路が舗装されていることのありがたみや、飲める水が蛇口からいくらでも出てくることのありがたみなどに気づくことはできませんでした。

ただ、同時に驚いたことは、貧困で生活も日本に比べ大変なのにも関わらず、皆が笑顔だったことです。作業の合間に近隣の学校を訪れた時も、子どもたちは常に笑顔で、目を輝かせて私たちを迎え入れてくれました。現場の労働者の方々も、マンゴーやメイズ、主食のポシヨを分けてくださるなど、心の豊かさに触れる瞬間が多くありました。ウガンダの人々はとにかく明るく、人とのコミュニケーションが好きな人ばかりでした。

ただいいことばかりではなく、現地に駐在されている方に仕事をする上で大変だったことを聞くと、ウガンダでは時間を守らない、仕事をサボる、植林をしても燃やされる、太陽光パネルを設置しても盗まれる...などなど、日本では考えられない課題が山積みであることを教わり、日本の常識の通じない場所で仕事をするの大変さも知りました。



画像 6 笑顔の小学生たち



画像 7 メイズと作業風景

4.最後に

私はこのボランティアを通して、大きく文化や価値観の異なる場所で多くの学びを得ました。ただ、それと同時に共通点も発見することができました。例えば、小さい頃から家畜を食べるのが当たり前の場所で生きてきた人でも、命をいただくことに抵抗があったことや、休憩中の雑談の内容が日本の大学生と同じだったことなどがあります。

実際に現地の人と汗を流して働く中で、様々な生活環境の人との交流を持つことができました。この経験を活かし、今後の国際協力のあり方や自分自身の進路、選択に活かしていきたいと思いました。

道普請人の皆様、並びに今回のプログラムに関わってくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。